

家族領域での時間と妻の関係満足度

田中 慶子

(財団法人 家計経済研究所 研究員)

1. はじめに

ワーク・ライフ・バランス（以下、WLBと略す）の実現、すなわち「仕事と家庭」という領域間の調整をすることは、同時に各領域において、相互作用する行為者同士の調整を必要とする。本稿では、家族領域における、夫と妻の家族生活における生活時間のバランスに注目する。

かつては「亭主元気で留守がいい」という、物理的に離れている（けれども関係が悪いわけではないという）関係が、わが国の典型的な夫妻関係のあり方とされてきた。しかし今日では、WLB実現のためには、家族と過ごす時間や機会を増やす取り組みを行うことが、ひとつの解決策とされているなど（内閣府2007: 50-51）、円満な夫妻関係を続けるために、趣味の共有や旅行など夫妻が共に行動し、夫の家事参加などを通じて共有する時間を増やすなど、「夫妻の時間」をもつこと、そして積極的な夫妻間のコミュニケーションが求められている。ところが、現代の家族（夫妻）をみると、共働き世帯が増加し、夫の長時間労働で在宅時間が短いだけでなく、24時間営業・年中無休のサービス業をはじめとする業態の出現など、勤務条件が多様化・複雑化している。とくに在宅時間が不規則な家庭では、相互の生活時間の調整、とくに子どもがいる場合、子どもの生活にあわせた調整が必要となるだろう。（個人の意思はともかくとして）家族や夫妻をとりまく空間的・時間的な条件が、家族での時間を過ごすことを困難にしていることはこれまでもくりかえし指摘されてき

た。はたして、妻にとって夫がずっと「留守」という現状はどのように感じられているのだろうか。個人のwell-beingを高めるような、個人と家族との関係、そして調和的な家族と仕事の関係のあり方を模索することが求められている。

そこで本稿では、仕事が休みの日および家事・育児、余暇といった家族領域での時間と夫妻の「関係の質」との関連を検討する。同じ日に休めないという、物理的に会える時間が少ない夫妻は、「関係の危機」を経験しやすいのだろうか。また、夫の家事・育児参加や余暇の時間は夫妻関係にどのような影響をもつのだろうか。パネル14を用いて、夫妻の休日や夫と妻の家事や余暇時間の配分と、妻による現在の夫婦関係についての満足度（以下、関係満足度）との関連の検討をおこなう。

2. 先行研究

(1) 夫妻の生活時間の相互関係

これまでの生活時間研究において、家族領域についての研究は、性別やライフステージ別、妻の就業状態や労働時間別に1日あたりの家事・育児時間や余暇の時間や行為時間、およびそれらの時系列での推移が示されていることが多い（たとえば水野谷 2005）。近年の傾向として、男性の家事時間の増加と女性の家事時間の減少が止まったことが指摘されている（NHK放送文化研究所編 2006）。

夫と妻の生活時間の相互関連についての先行研

究の多くは、家事・育児に集中している。また時間で尋ねるよりも、頻度で尋ねられることが多く、夫と妻の相互の調整や時間の共有という観点からの知見は多くない。だが、とくにわが国では国際的にみても夫の家事・育児時間がきわめて短いことから、男性の家事・育児への参加促進や抑制要因の解明、夫妻間の不平等という立場で、夫妻の家事・育児時間が注目されてきた。夫と妻の労働時間・家事時間の相互関連に注目した松田・鈴木(2002)では、妻の家事時間に占める夫のそのシェアを求め、労働時間が長いほど、家事時間は短くなること、夫妻間での家事時間は、トレードオフの関係にあるのではなく、妻の労働時間が自分以上に長いときに夫の家事時間が増加することがあきらかにされている。すなわち、まず妻が中心となって家事をおこない、妻がすべてできないような場合に夫が支援するという夫妻の家事分担像が示唆されている。また家族における平等の実現という観点から家事分担に注目している田淵(2007)は、家事時間でみると共働きよりも専業主婦の夫の家事時間のほうが長い、共働き夫妻では妻の家事時間が相対的に長くないため夫妻の家事負担割合としては平等化の方向に向かっていることを示している(ただし、その達成には25年かかるという)。

このように夫妻の家事・育児時間については、もっぱら妻がおこなっているという現状と同時に共働き夫妻における家事分担の「平等化」のきざしが確認されている。しかしこれらの研究では、(男性の家事・育児)時間の変化に注目しているが、具体的にそのような分担のあり方が、個人に、とくに妻にとってどのような意味をもつのかあきらかではない。

いっぽう、仕事が休みの日(以下、「休曜日」とする)と生活時間に注目している研究は多くない。数少ない休曜日に関する研究として平田・貴志(2002)があげられる。夫妻相互の休曜日と家事時間と自由時間の関連について、以下のことをあきらかにしている。就業日の組み合わせ別にみると、夫が就業日である場合よりも休日である場合の方が妻の家事労働の時間的負担が減少してい

るが、夫の休日の効果は妻にまで十分及んでいるわけではないこと。また、妻が休日でも夫が就業日であると自由時間は短く、妻の休日の効果は小さく、全体として有職者の職業労働時間を短縮するだけでは夫妻の生活時間配分のバランスがとれるとは限らないという。

以上のように、わが国の現状では、共働き夫妻において、とりわけ妻の家事負担が重いこと、そして夫妻間のバランスが十分にとれていないという実態がわかる。しかし、これらの研究では、どのような生活時間の配分を理想とするのか、何らかの生活時間やパートナーシップのあり方を前提として「平等」が議論されている。現在の夫妻の分担のあり方が、個人にとってどのように評価されているのか、端的には共働きの妻は過重負担に不満はないのか、ということをあきらかにすることが必要である。

(2) 夫妻の生活時間と「関係の質」についての研究

わが国では、ほぼ一貫して夫よりも妻の関係満足度が低く、その背景には性別分業的な、非対称的な夫妻関係のあり方が指摘され(柏木 2003)、家事・育児の分担の不均衡と、夫妻の「関係の質」についての議論が蓄積されている。家事の分担状況と不公平感の関連について、イデオロギー論(分担に関する価値観が影響を及ぼすとする立場)や衡平理論(夫妻間で等価な財の交換がなされているかどうか)に注目する立場から説明されている(岩間 1997)。

夫妻の「関係の質」については、総合的な評価の指標である関係満足度が取り上げられることが多く、結婚年数にしたがってU字カーブを描くことが知られている。関係満足度を規定する要因は、性別、学歴(教育年数)、ライフステージ、親との同居の有無などの社会経済的な属性とともに、夫妻の家事・育児分担や、同伴(共同)行動、情緒的サポートなど、夫妻の相互作用のあり方の影響が検討されてきた。性別およびライフステージによって若干異なるが、夫妻で同伴(共同)行動をしている、夫からの情緒的サポートが得られる妻の関係満足度は高い。しかし、夫の家

事参加の関係満足度への影響については一貫していない。木下（2004）は、第1回全国家族調査（NFRJ98）から子どもがいる場合は、夫の家事参加が妻の関係満足度を高めることを報告しているが、大和（2006）は同じデータを用いて、育児期（末子12歳未満）には家事参加の影響は認められないが、非育児期（末子12歳以上）においては妻の収入貢献度が高い場合、夫の家事参加は妻の関係満足度を高めるとい¹⁾。

以上のように、先行研究では夫の家事・育児時間（参加）や夫妻間の分担と関係満足度との関連が検討されてきたが、ライフステージや妻の就労状況によって異なる知見が得られている。関係満足度についての諸要因を考慮したうえで、夫妻の家族領域での時間と、関係満足度との関連を検討することが必要である。

3. 夫妻の休日数・休曜日

本稿では、パネル14を用いて、夫妻の家族領域での時間と関係満足度について検討をおこなう。家族領域での生活時間について以下の2つの方法で把握されている。ひとつは妻本人が回答する、6カテゴリーの生活時間と、妻の観察による同じ6カテゴリーの夫の生活時間が10分単位で測定されており²⁾、本稿では家事・育児時間と余暇の時間を家族領域での時間と考える。また、1週間あたりの休みの日数³⁾と休みの曜日（以下、「休曜日」と表記する）が尋ねられている。

最初に、夫妻の休日の実態について確認しよう。パネル14のうち有配偶で、有職もしくは専業主婦の者を対象とする。サンプル数は1,177人で、妻の就労状況別の内訳は、フルタイム227人（19.3%）、パート420人（35.7%）、自営62人（5.3%）、専業主婦468人（39.8%）である。平均年齢は妻37.67歳（標準偏差5.93）、夫40.03歳（標準偏差7.16）で、結婚年数の平均は、12.3年（標準偏差6.87）、子どもがいる夫妻が全体の87.3%である。

まず、1週間あたりの平均休日数をみると、全体では、夫1.59日（標準偏差0.54）、有職の妻は、2.1日（標準偏差0.82）で、妻の就労状況別にみると、フルタイ

ム夫妻は、夫1.6日（標準偏差0.49）、妻1.8日（標準偏差0.38）、パート夫妻は夫1.6日（標準偏差0.53）、妻2.3日（標準偏差0.90）、自営夫妻では夫1.1日（標準偏差0.45）、妻1.6日（標準偏差0.85）、専業主婦の夫1.6日（標準偏差0.54）となっている。自営夫妻における休日の少なさが顕著である。

次に、パネル14では、どの曜日が休みであるのかを尋ねている（複数回答⁴⁾）。共働きの夫妻（709組）の休曜日の組み合わせに注目すると、一致して休みとなっている曜日は、日曜日 59.6%、月曜日 1.1%、火曜日 1.3%、水曜日 0.8%、木曜日 0.6%、金曜日 0.3%、土曜日 34.6%、「決まっていない」 9.3%となっており、共働き夫妻の約6割は日曜日がともに休日であり、約3割は土曜日がともに休日となっている。夫妻の休みが特定できるケース（480組）に限定し、休曜日の組み合わせから「平日休み」「日曜のみ休み」「土曜のみ休み」「土日とも休み」に区分し、夫妻の休曜日のパターンを組み合わせた結果を図表-1に示す（%は全体を100として求めた）。夫妻ともに「土日とも休み」は48.5%、土曜日が日曜日のいずれか1日が一致して休みは、11.0%となっており、全体で約6割の夫妻は、同じ休曜日パターンとなっている。そして、夫は平日休み・妻は週末休みという組み合わせは11.2%、妻は平日休み・夫は週末休みという組み合わせは15.4%となっており、全体の約4分の1の夫妻では休日が一致していないことがわかる。

夫と妻の休曜日の組み合わせから（妻が専業主婦の場合は、夫の休曜日と同じとする）、夫妻で休曜日が「不一致」「週末週休2日」「土日いずれか休み」「平日休み・不定休（以下、平日休みと略記）」の4群に分けて（以下、休曜日パターンとする）、基本的な属性との関連をみてみよう（図表-2）。まず、妻の就労状況別にみると、フルタイムと専業主婦では週末週休2日が多く、パートでは不一致と週末週休2日、土日いずれかが休みがほぼ均等で、自営では土日いずれか、もしくは平日休みが多くなっている。

夫の職種別にみると、やはり自営・家族従業員では平日休みが31.7%と多い。技能・サービスでは

図表-1 共働き夫妻における休曜日の組み合わせ

		妻の休日				(%)
		平日	日曜のみ	土曜のみ	土日休み	行計
夫の休日	平日	2.5	1.3	0.2	1.7	5.6
	日曜のみ	2.3	10.8	0.6	19.4	33.1
	土曜のみ	0.0	0.0	0.2	0.4	0.6
	土日休み	1.5	9.0	1.7	48.5	60.6
	列計	6.3	21.0	2.7	70.0	100.0

図表-2 基本属性別 休曜日パターン

		人	不一致	週末週休 2日	土日いずれか 休み	平日休み	(%)
妻の就労状況	フルタイム	227	21.1	44.9	26.4	7.5	$\chi^2 = 255.5^{***}$
	パート・嘱託	420	33.1	30.5	27.6	8.8	
	自営	62	19.4	8.1	37.1	35.5	
	専業主婦	468	—	54.3	22.4	23.3	
	計	1177	16.9	41.5	25.8	15.7	
夫職種	自営・家族従業	186	16.1	11.8	40.3	31.7	$\chi^2 = 251.9^{***}$
	管理・専門	92	17.4	46.7	25.0	10.9	
	技術・教員	197	11.2	67.0	15.7	6.1	
	事務	244	11.9	68.0	13.9	6.1	
	技能・サービス	456	22.4	27.4	30.9	19.3	
計	1175	16.9	41.5	25.9	15.7		
結婚年数	0~4年	168	12.5	40.5	28.0	19.0	$\chi^2 = 43.07^{***}$
	5~9年	276	12.7	52.5	18.5	16.3	
	10~14年	253	15.8	41.5	28.1	14.6	
	15~19年	271	18.8	41.7	26.9	12.5	
	20年以上	206	25.2	27.7	29.6	17.5	
計	1174	17.0	41.6	25.8	15.7		
家族ステージ	末子0~3歳	280	5.4	52.1	23.9	18.6	$\chi^2 = 57.3^{***}$
	4歳~未就学	144	18.8	43.1	23.6	14.6	
	小学生	311	18.6	40.2	25.7	15.4	
	中学生	146	24.7	37.0	29.5	8.9	
	高校生	146	23.3	27.4	29.5	19.9	
計	1027	16.6	41.6	26.0	15.9		

***p<0.01

不一致が22.4%と多くなっていることが注目される。技術・教員や事務では約8割が週末1日は休曜日となっている。

以上のように、自営夫妻では休日の日数が少ないこと、特定日がある共働き夫妻の休曜日は、約6割が同じ曜日で、また夫の職種によって休曜日パターンが異なっていることを確認できた。

4. 休曜日パターンと関係満足度

(1) 休曜日パターンとライフステージによる違い

上記同様、夫妻の休曜日パターンを「不一致」

「週末週休2日」「土日いずれか休み」「平日休み」の4群に分け、家族ステージとの関連をみてみよう(図表-2)。まず結婚年数別(5年ごと)にみると、結婚20年以上では不一致が25.2%と多く、結婚5~9年では、週末週休2日が多くなっており、子どもの成長にあわせて夫妻が休みを調整していることが予想される。そこで末子基準の家族ステージ別に休曜日パターンをみてみると、末子が乳児のころは、いずれかの曜日でも休みが一致している夫妻が多く、不一致は5.4%にとどまる。しかし、子どもが中学生・高校生では、4分の1近くが不一致パターンである。妻の就労状況と家族ステージ別にみると、パート・嘱託で末子が中学生・高校生という夫妻で、フルタイムでも末子が高校生では不一致パターン

が多い。

結婚生活が20年以上の長期にわたる夫妻において、それまでの夫妻の「選好」の結果や、職業上の変化などさまざまな要因を考慮する必要があるが、単純集計のレベルではあるものの、子ども生活や成長にあわせて、夫妻の休曜日が調整されている可能性を確認できる。末子が中学・高校になるころには、お互いの仕事の都合が優先されるようになると考えられる。

(2) 休曜日パターンと関係満足度

次に上記のような夫妻の休日取得パターンと夫

図表-3 関係満足度を従属変数とした多元配置の分散分析の結果

	休曜日パターン	平日の家事	休日の家事	平日の余暇	休日の余暇
	F	F	F	F	F
本人学歴	11.80 ***	7.26 **	10.39 ***	3.64	4.74 *
親同居ダミー	2.20	1.25	2.37	0.38	0.09
義親同居ダミー	0.44	0.63	0.06	0.43	0.75
結婚年数	7.85 **	4.93 *	13.60 ***	3.09	3.45
結婚年数 2 乗	6.43 *	4.86 *	14.48 ***	1.07	2.06
世帯年収	0.09	2.00	0.13	1.72	0.14
未就学児ありダミー	0.76	1.90	0.07	2.00	0.16
小学生	2.48	2.78	0.94	3.39	0.02
常雇ダミー	0.41	0.03	0.00	1.26	1.41
パートダミー	0.21	1.08	0.66	3.73	0.04
自営ダミー	0.00	0.35	0.95	1.85	0.39
休曜日パターン	4.52 **				
平日の家事		3.04			
休日の家事			9.37 ***		
平日の余暇				0.30	
休日の余暇					7.72 ***
R ²	.065 ***	0.41 ***	.084 ***	.083 ***	.049 ***
人	996	781	664	482	458

*** p < 0.01, ** p < 0.05, * p < 0.1

妻関係の質との関連を検討しよう。「関係の質」を測定する指標として妻の関係満足度をとりあげる。先行研究とは異なり、直接的な相互作用の頻度ではないけれども、休曜日パターンは、夫妻の関係の相互作用の構造をとらえている側面もあるだろう⁵⁾。ここでは、統制変数として、先行研究を参考に妻の学歴、親・義親との同居（それぞれダミー変数）、結婚年数、結婚年数の2乗、世帯年収、子どもの有無（未就学児ダミー、小学生以上ダミー）、妻の就労状況（常用雇用ダミー、パートダミー、自営ダミー）、を投入し、関係満足度（範囲：1～5点）を従属変数とした一般線形モデルによる分析をおこなった（図表-3）。モデルは統計的に有意な結果となり（調整済みR².065, p<.000）、統制変数については、結婚年数とその2乗、妻の学歴が統計的に有意な結果となった。結婚年数とその2乗が有意であったことから、関係満足度はU字カーブを描いている。また妻の学歴も統計的に有意な結果となっており、高学歴であるほど関係満足度は高い。ここでは親・義親との同居、子どもの有無、世帯年収、妻の就労状況との関連は認められなかった。休曜日パターンによって関係満足度は異なっており、横断データではあるが、統制変数によって調整した関係満足度

を結婚年数別に図表-4に図示すると、週末週休2日の夫妻において関係満足度が最も高く、次いで平日休み、不一致群、土日いずれか休みの順となっている。多重比較の結果、「土日いずれか休み」と「週末週休2日」、「平日休み」との間で統計的に有意な差が認められた。またそれらは（若干の変動はあるけれども）全体として安定的に推移している。

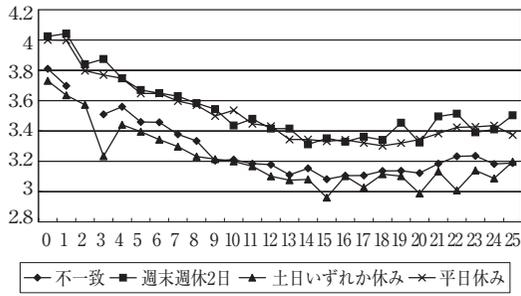
また、休日数と休曜日パターン別に関係満足度

を比較すると、「週末週休2日」は3.53点、「平日休み」では、休日が週あたり2日では3.54点、1日では3.54点、1日未満では3.49点、「土日いずれか休み」では、週あたり1日では、3.24点、1日未満では3.20点、「不一致」では、週あたり2日で3.45点、1日未満では3.24点となっており、同じ休曜日パターン内でも、休日数が多いほうが関係満足度は高い。

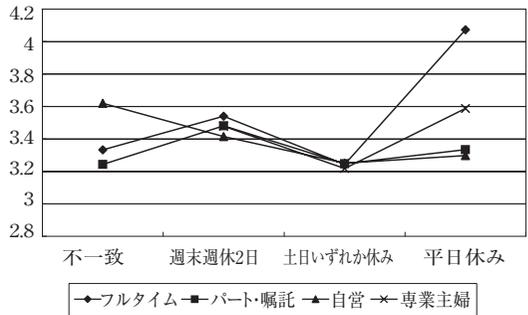
妻の学歴、親・義親との同居（それぞれでダミー変数）、結婚年数、結婚年数の2乗、世帯年収、子どもの有無（未就学児ダミー、小学生以上ダミー）を統制して、妻の就労状況と休曜日パターンの組み合わせ別に関係満足度を比較すると（図表-5）、就労状況にかかわらず、休曜日パターンによって差があり、フルタイムでも週末週休2日の場合は、関係満足度が高い（フルタイムの平日休みで一致パターンは、サンプル数が少なくここでは留保する）。

以上のように、横断データではあるが、休曜日パターンは、家族の発達、とりわけ子どもの学齢によって異なること、また関係満足度との関連をみると、休曜日が週末で一致している夫妻、週休2日の夫妻で、妻の満足度は高いことが明らかとなった。

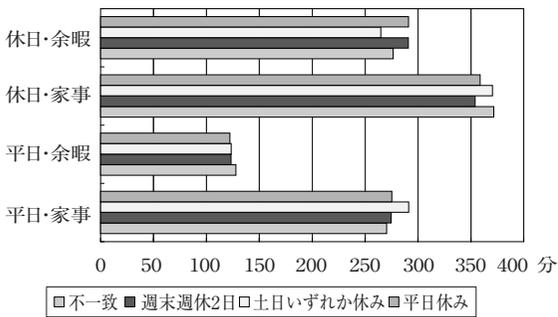
図表-4 休曜日パターン別 結婚年数別 関係満足度 (パネル14)



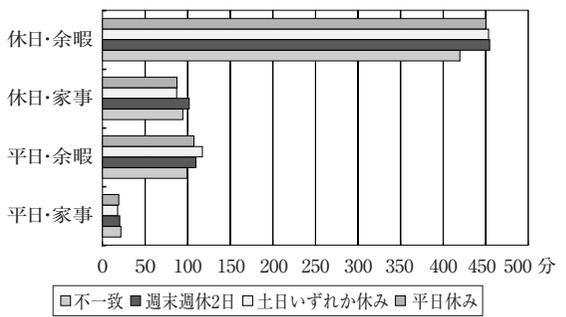
図表-5 休曜日パターン・妻の就労状況別 関係満足度 (パネル14)



図表-6 休曜日パターン別 妻の生活時間



図表-7 休曜日パターン別 夫の生活時間



5. 家事時間・余暇時間と関係満足度

(1) 休曜日パターンと家事時間・余暇時間

一緒にいる時間が少ない夫妻と、逆に多い夫妻では、家族領域での時間はどのように異なるのだろうか。ここでは夫妻関係の一側面として、家事・育児時間（以下、家事時間とする）と、趣味・娯楽・交際などの時間（以下、余暇時間とする）をとりあげて検討する。上記同様、パネル14を用い、共働き夫妻の休日取得パターン別に家事時間、余暇時間の観察をおこなう⁶⁾。

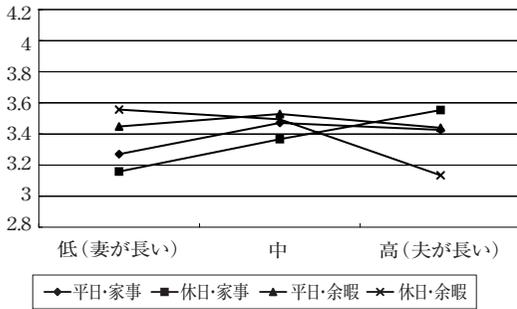
個人の生活時間は、ライフステージや世帯の状況などによって違う様相をもつため、ここでは結婚年数、子どもの有無（未就学児あり、小学生以上の子どもありのダミー変数）、妻の就労状況を統制したうえで、生活時間を従属変数とし、休曜日パターンを独立変数とする一元配置分散分析をおこない、休曜日パターンによる差異を検討した。結果は、図表-6、図表-7に示す。休曜日パターンによって、生活時間に違いがあるのは、平日の夫の余暇時間のみであった。多重比較をお

こなったところ、「不一致」群と「土日いずれか休み」群で差があり、統制変数によって調整した平均時間は、不一致群では99.11分、土日いずれか休み群では117.23分と、後者では20分近く余暇時間が長くなっている。

(2) 夫妻の家事・余暇時間のバランスと関係満足度

次に、夫と妻の家事時間・余暇時間のバランスに注目しよう。家族領域での時間は、個人の選好や世帯の状況によって所要時間は大きく異なるため、「関係の質」に対しては、たんに時間の長短だけではなく、成員相互のバランスが問題となる。ここでは平日、休日の家事、余暇時間別に、夫の生活時間/妻の生活時間で夫妻間の時間の比を求める。時間が同一である場合値は1となり、妻の方が長ければ1より小さい値、夫の方が長ければ1より大きい値となる⁷⁾。各項目別に比率が低群（すなわち夫にくらべ妻の時間が長い）、中群、高群（妻にくらべ夫の時間が長い）の三分位⁸⁾に分けて、前記の関係満足度に対する統制変数を投入

図表-8 休曜日パターン別 夫妻の生活時間の比別 関係満足度



し、一般線形モデルによって関係満足度を比較した(図表-8)。

結果は図表-8に示すように、平日の家事、休日の家事、および休日の余暇時間における夫と妻の時間の比によって、妻の関係満足度は異なっていた。最初に統制変数について確認すると、家事時間については、平日・休日ともに本人学歴と結婚年数、およびその2乗が、余暇時間については休日のみ、本人の学歴との関連が認められる。

夫妻での比による関係満足度の違いをみると、平日の家事時間では、夫の家事時間が0であると、妻の関係満足度は低く、ほんのわずかでも夫が家事をおこなっている夫妻とくらべて0.2点の差があった(ただし夫の家事時間の比が増加しても、妻の関係満足度はあまり高くなっていない)。休日の家事時間では、妻の比率高群から順に、3.16、3.37、3.55点と妻にくらべて夫の家事時間が多いほど、妻の関係満足度は高い。最後に休日の余暇時間は、妻の余暇時間が長いほど関係満足度は高く、夫の余暇時間が長いほど、妻の関係満足度は低い。多重比較の結果、夫の比率が高い群とそれ以外で差があり、妻低群3.56点、中群3.50点、夫高群3.13点である。

このように平日は時間的にはわずかでも、休日はできるだけ家事をする場合、もしくは妻の方が夫よりも多くの余暇時間をもっている場合、夫の余暇時間が長時間ではない場合、妻の関係満足度は高い。夫が平日に家事を少しでもやっている(と妻に認識される)ことや、休日に夫が家事をすること、妻の方が余暇に費やす時間が多いなど、週休2日で時間的にゆとりがあり、家族領域

での時間を多くもってくれる(と予想される)夫に対して妻の関係満足度は高くなっていることから、夫の家族生活での時間の増加は、妻の主観的well-beingにとっても重要である。

6. まとめ

本稿では、共働き夫妻に焦点をあわせて、休曜日のパターンや夫妻間での時間のバランスと夫妻関係の関係満足度との関連を検討した。知見をいま一度整理すると、(1) 休日の状況について、自営夫妻では休日数が少なく、特定日が休みの共働き夫妻では約6割が一致している。(2) 休曜日パターン別に関係満足度を比較すると、妻がフルタイムかパートかにかかわらず、週末週休2日、平日休み(週休2日、1日>1日未満)、曜日不一致(週休2日>1日未満)、土日いずれか休みの順となっており、週休2日であり、休曜日が一致しやすい妻の関係満足度は高い(ただし自営の場合は少し異なる)。(3) 夫妻間での家事時間、余暇時間のバランスごとに関係満足度をみると、家事をする夫、休日の余暇時間が妻よりも短い場合に妻の関係満足度は高く、休日の夫の余暇時間が長いときは低い。

これらの結果から、週休2日の実現および夫妻が互いに家族領域での時間を確保し、夫が家族役割(ここでは家事)に参加することが、妻の関係満足度を高めることが示唆される。妻にとって夫が「留守」は望ましいのかという最初の問いに答えるならば、週休2日で一緒に休む、平日にわずかでも夫に家事時間がある(すなわち0分ではない)場合に、妻の関係満足度は高いことから、ある程度「留守ではない」状況が、妻のwell-beingにとって望ましい(正確には、関係満足度を高く表明できる)と考えられる。WLBと少子化との関連で補足すると40歳以下の妻について、休日数や休曜日パターンによって出産意欲に違いはみられない。このことから夫妻の働き方(物理的にすれ違いの生活)そのものが問題なのではなく、夫妻が互いに「関係の質」を高めること、本分析の結果からは、夫が家事をおこない、休日

の余暇を控えめにすることが妻の関係満足度には重要な効果をもつ。

本稿は横断データの一時点の分析であり、今後は、パネルデータの特徴を生かして、その因果関係（夫との関係に満足していないから物理的に距離をおくのか、それとも互いに離れた状態だから満足できなくなるのか）をあきらかにすることが必要である。また「適切な距離」のあり方は、家族ステージや配偶者に対する期待などによって、異なっていると思われる。それらの条件を考慮した検討をおこなうことが今後の課題である。

注

- 1) ここでは知見の相違を指摘するにとどめるが、両者の統制変数や相互作用についての変数（木下は同伴行動、大和は情緒的サポート）と夫の家事との関連についても考慮する必要があるだろう。
- 2) ただし、行為の時刻は尋ねていないため、夫妻が行動を共にしているのか否か、行為のズレには言及できないという限界をもつ。
- 3) 1週間あたりの休日数を尋ねている。調査票に「隔週休みは0.5と換算して下さい」という教示があり、小数点1桁の単位まで回答されている。
- 4) パネル14からは、たとえば週休2日が特定曜日と不定休というようなパターンなどを想定し、両者が並立している場合もある。
- 5) 本稿では、夫妻の休曜日が一致していること、子どもの学校の問題も考えると、土日の週末が休日となること、夫妻が共に行動するには重要であるという前提である。もちろん休日の曜日が一致している、家事や余暇の時間が長いからといって、夫妻が時間を共有しているとは限らない。逆に休日の一致しない夫妻でも、関係満足度が高まる条件、たとえば非対面的な方法によって積極的なコミュニケーションをとっている場合もあるだろう。反対に対面的なコミュニケーションが短時間であるからこそ円満である可能性もあることに留意が必要である。
- 6) 各生活時間は、平均値+3標準偏差を基準として、はずれ値を除去している。
- 7) もちろん、夫妻で同一の時間であっても、その内実はさまざまである。本調査では時刻がわからないため特定できないが、近似していれば、同一行動となる可能性

は高いと考えている。

- 8) 各項目についての三区分別は以下の通り。平日家事：0/0.01~0.29/0.3以上。休日家事：0~0.1/0.11~0.33/0.34以上。平日余暇：0~0.49/0.5~0.99/1以上。休日余暇：1~1.08/1.09~2.0/2.1以上。

文献

- 岩間暁子, 1997, 「性別役割分業と女性の家事分担不公平感——公平価値論・勢力論・衡平理論の実証的検討」『家族社会学研究』9: 67-76.
- NHK放送文化研究所編, 2006, 『日本人の生活時間・2005』日本放送出版協会.
- 柏木恵子, 2003, 『家族心理学——社会変動・発達・ジェンダーの視点』東京大学出版会.
- 木下栄二, 2004, 「結婚満足度を規定するもの」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会, 277-291.
- 田淵六郎, 2007, 「家族とポジティブ・アクション」田村哲樹・金井篤子編『ポジティブ・アクションの可能性』ナカニシヤ出版, 191-212.
- 内閣府, 2007, 『平成19年度版 国民生活白書——つながりが築く豊かな国民生活』.
- 平田道憲・貴志倫子, 2002, 「就業休日バタンからみた夫妻の家事労働時間と自由時間」『日本家政学会誌』53(6): 521-528.
- 松田茂樹・鈴木征男, 2002, 「夫婦の労働時間と家事時間の関係——社会生活基本調査の個票データを用いた夫婦の家事時間の規定要因分析」『家族社会学研究』13(2): 73-84.
- 水野谷武志, 2005, 『雇用労働者の労働時間と生活時間』御茶の水書房.
- 大和礼子, 2006, 「夫の家事・育児参加は妻の夫婦関係満足度を高めるか? ——雇用不安定時代における家事・育児分担のゆくえ」西野理子・稲葉昭英・嶋崎尚子編『夫婦、世帯、ライフコース——第2回 家族についての全国調査 (NFRJ03) 2-1』(第2次報告書 No.1), 17-33.

たなか・けいこ 財団法人 家計経済研究所 研究員。
主な論文に『「パラサイト・シングル」仮説の検証』(『家族関係学』22, 2003)。家族社会学専攻。
(tanaka@kakeiken.or.jp)